



広内哲夫・小坂 武 共著

意思決定支援システム——DSS構築の方法論

竹内書店新社 B5判 219頁 1983年6月発行 2800円

オペレーショナル・システムの積み上げを基本としたMISが、データベースなどこれを支える技術の未成熟と相まって、幻となったあとを受けて、Mortonらが意思決定支援システム（Decision Support System）の概念を提唱して以来、早くも10余年を経た。ボトムアップ型の集団意思決定を特徴とするわが国の経営体質の中で、個人によるトップダウンを主体とする米国で生まれたDSSの概念が実施可能かどうか、あるいは意思決定はトップの役割であるが、はたしてトップがみずからこれを使うだろうか、などの議論の中から、ある程度の方向がみえてきつつあるのが、わが国の現状であろう。もともと米国においても、その適用分野として、大規模データベース、あるいは大量の計算とデータ処理を必要とする意思決定とともに、各部門間のすり合わせ、協議を必要とする意思決定があることが、ウェスティングハウス社の例をもとにしてあげられている。これは、わが国の意思決定環境にはほぼ合致するものである。また、トップの意思決定という言葉から連想されるトップレベルの戦略的意思決定もさることながら、各レベルの管理者またはスタッフがかかえるもっと日常的な問題解決や意思決定を援助するシステムがまず現実的アプローチであることも認識されてきた。

著者らは、まえがきで、「日本的経営風土に合致するDSSは、その主要な対象を広範なマネジメントとし、その意思決定問題において、代替案の作成、評価の過程より、むしろ、日常の問題発見の過程が大切である」と述べている。わが国の経営風土に合わせて、現実的な面に原点をおいていることが、本書の第1の特徴である。第2の特徴は、机上の理論でなく、著者らが開発したパッケージによる経験にもとづいている点である。このパッケージは、データベース、モデル群および人間—機械系インターフェースで構成され、汎用性をもつものである。

本書は10章で構成されており、その概要は次のとおりである。

第1、2章では、従来の伝統的な業務処理システムと対比しながら、DSSの概念とその特性、適用分野を、

主として先駆的な米国の文献を参照しつつ述べている。

第3章で、DSSのアーキテクチャを決定する基本要件として、柔軟性と使いやすさをおく。この要件を満たすために、分割したユニット・モデルの有機的結合によるべきことおよび利用者とのインターフェースでは、習熟度の向上および非構造的問題が時とともに構造化されてくるのに対応するかが課題であることを明らかにしている。

第4章から第5章では、マネジメントのレベルに応じて必要とするデータの性格が異なるとして、それぞれに必要なデータベースの特性を考察し、これにこたえるためのDSSデータベースとして、ネットワーク型データモデルの考え方を述べている。ついで、ユニット・モデルとしてどんな機能をもつものが必要なのか、またその各々の内容や手法として何が必要かを示している。

第6、7章は、以上の考え方にもとづいて、著者らが開発したパッケージDSS1100-Dのフレームワークの紹介にあてている。具体的なシステム構成、アーキテクチャの機能と構造について、使いやすさをどのような手法によって実現したかを述べている。

第8章では、その適用例を紹介する。販売戦略、販売店の要員計画、銀行における預金量子測などについて、データ操作、モデル作成の面からとりあげている。

第9、10章では、データベースおよびモデルの設計法、実際にこれを構築する場合の方法および問題点について言及している。

DSSについての成書がほとんど見当たらない現在、これからDSSを構築しようとするシステムズ・エンジニア、上級プログラマにとって本書は特に有用であろう。また、これを利用しようとする管理者、スタッフも、その特徴、使用法を理解するため一読してほしい。DSSの鍵を握るのは、各レベルの管理者、スタッフにとって必要なデータをどう選択していくかである。その手法もいくつか実用化されている現在、DSSの人間の側面とともに、この面についても、今後さらに論をすすめられることを期待したい。

(山下達哉 日本アイ・ビー・エム㈱)